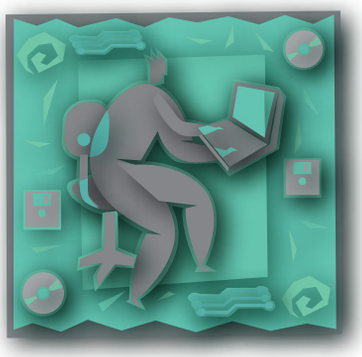


IPSJ Digital Courier への道のりと期待

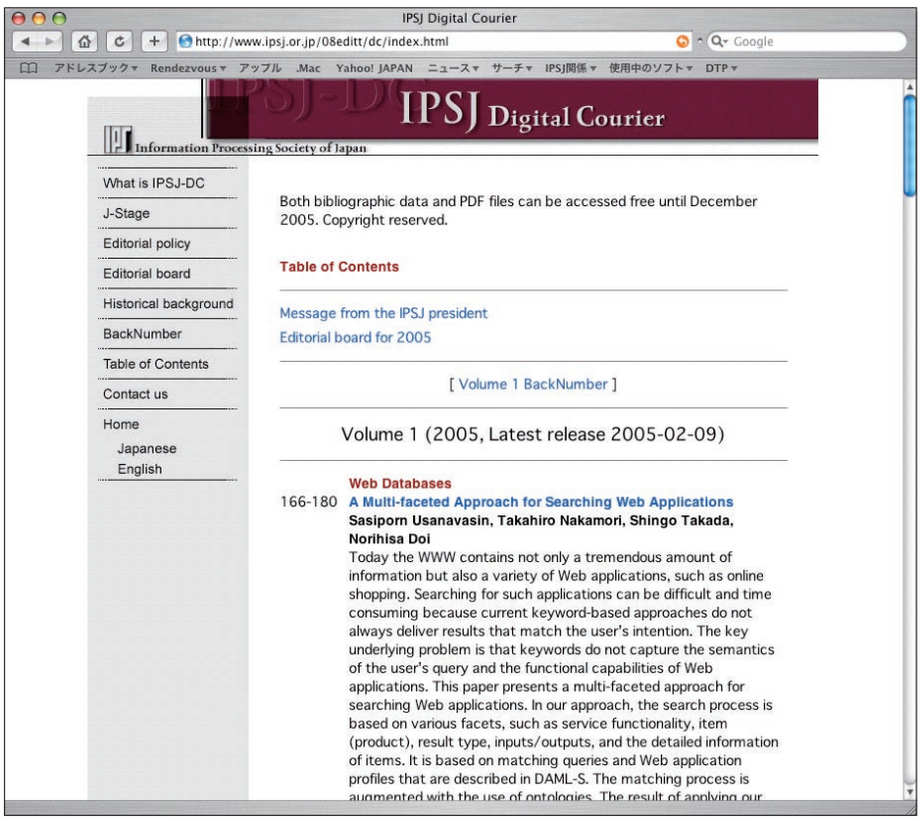
益田 隆司
電気通信大学／情報処理学会会長
masuda@office.uec.ac.jp

平成17年1月，情報処理学会に新たな英文論文誌IPSJ Digital Courierが誕生しました．JSTのJ-Stageによるオンラインジャーナルです．このオンラインジャーナルは，情報処理学会論文誌とトランザクションに採録された英文論文を集めた英文ジャーナルです．その意味では，独立したジャーナルではありません．論文誌あるいはトランザクションに英文論文の採択が増えれば，IPSJ Digital Courierに掲載される論文の数が増えるという仕組みです．IPSJ Digital Courier の現在の状況は，http://www.ipsj.or.jp/08editt/dc/index.html でご覧になれます．

我が国の情報系の中核となる情報処理学会がなぜこれまで英文論文誌を持っていなかったのでしょうか．情報処理学会でも論文の国際化の重要性は，学会が設立された1960年から強く認識されていました．1978年には，英文論文誌Journal of Information Processing（JIP）が季刊で刊行され，和文論文誌と英文論文誌が並行して存在する時代もありました．しかしながらJIPは，創刊後時間が経っても，国外にサーキュレーションが広がらなかったこと，良質の英文論文は海外の雑誌に投稿されてしまう場合が多いこと，それに，財政的に維持することが大きな負担になってきたことなどの理由によって，1993年のVol.15をもって休刊となりました．物理，化学，生物など自然科学系の学会は，論文誌といえば英文です．そういった学会でも，現在英文論文誌の維持には大きな苦労があるようですが，その理由はJIP休刊の理由とまったく同じです．これらの学会の場合と異なって，情報処理学会がJIPを休刊できたのは，和文論文誌の方が主であったからです．

JIP休刊後は，学会論文誌が，和文，英文の両方を受け付けることになりましたが，論文の圧倒的多数は和文であり，その中での英文論文は国際化という面からは価値のないものでした．JIPを休刊してしばらく時間が経ってみると，情報処理学会は英文論文誌を持っていない学会だということが，学会の問題点として強く認識されるようになりました．時代の流れからいっても，論文誌の国際化は，理事会の中でも放って置くことができない重要な課題になりました．一方では，情報処理の分野で日本を代表する大学会が英文論文誌を持たないことは大きな欠陥であるという意見，他方では，いまから英文論文誌をつくっても国際的に評価されるものになることは至難の業であり，財政的負担，編集作業に要する若手研究者への負担等を考えると安易に英文論文誌はつくるべきではないという両方の意見が常に存在してきました．互いに他の立場が理解できるだけに出口の見えない苦しい議論が何年にもわたって継続しました．

JIPを休刊した原因を解決できる見通しが立たないまま，かつ，学会の財政的状況も休刊時よりも格段に厳しくなってきている現状でどういった形で論文誌の国際化を図るかが議論の焦点でした．和文の投稿に対する需要が十二分に存在している中で，現在の論文誌を全面的に英文化することは現実的ではないことははっきりしています．いくつかの具体的な提案がなされ検討されました．(1) JIPを復刊させる，(2) トランザクションのできるものからを英文化する，(3)現在の論文誌，トランザクションに掲載された論文のうち，優れたものを集めて，さらに改良を加えて英文誌をつくる，といった案です．しかしながら，これらの案はいずれも合意を得るに至りませんでした．(1) は，それにかかる手間，財政的負担を考えると決断できないものでした．(2) は，たとえ1，2のトランザクションが論文の英文化をしたとしても学会全体から見ると部分的なことになります．トランザクションの英文化はこれからも考えていけばいいことです．また，(3) の和文論文を発展的に翻訳しての英文誌は，日本の研究活動の海外への紹介の意味はありますが，論文誌の国際化とは考えが異なります．だれでもが自由に英文で論文を投稿できる場をつくるということが基本的に譲れないことでした．



こういったいずれもの案が暗礁に乗り上げてしまっているときに提案されたのが今回実現することになったIPSJ Digital Courierの方式でした．現在の論文誌，トランザクションに採録された英文論文だけを抜き出して電子ジャーナルとして発行するというものです．電子ジャーナルは時代の方向に合っています．(1)掲載までの時間が短縮される，(2)財政的負担が少ない，(3) 充実すれば国際的な学会誌としての評価を受けられる，といった利点があります．

IPSJ Digital Courierは，英文論文を投稿する立場から見ると，新規の英文電子ジャーナルの誕生と見ることもできます．オンラインジャーナルという発行方式が時代の流れになってきたので実現できたともいえます．それが成功するか否かは，これからどれだけ多くの質のいい英文論文が投稿されるか否かにかかっています．それを促すような施策も必要かもしれません．海外からの投稿に道を拓く必要もあります．これらはこれからの課題です．いまの時点で会員の方々にお願いしたいことがあります．ぜひ論文は英文で投稿することをお考え下さい．情報の分野でも論文の英文化率を高めましょう．IPSJ Digital Courierは，理事会，企画政策委員会，論文誌編集委員会，そして，事務局の方々も含めた場での長年の検討結果から生まれたものです．その成否は，情報処理学会の学会としての将来の命運にかかわる重要なことと考えています．将来的には，現在の論文誌，トランザクションに掲載される論文の多くの割合が英文化されることを期待しています．最後になりますが，Digital Courier（ディジタル通信使）という論文誌名は現代的でとてもしゃれていると思いませんか．オンラインジャーナルに相応しい名称です．これは和田英一先生の命名によるものです．

（平成17年3月12日）